

道 どうひょう 標

d o h y o

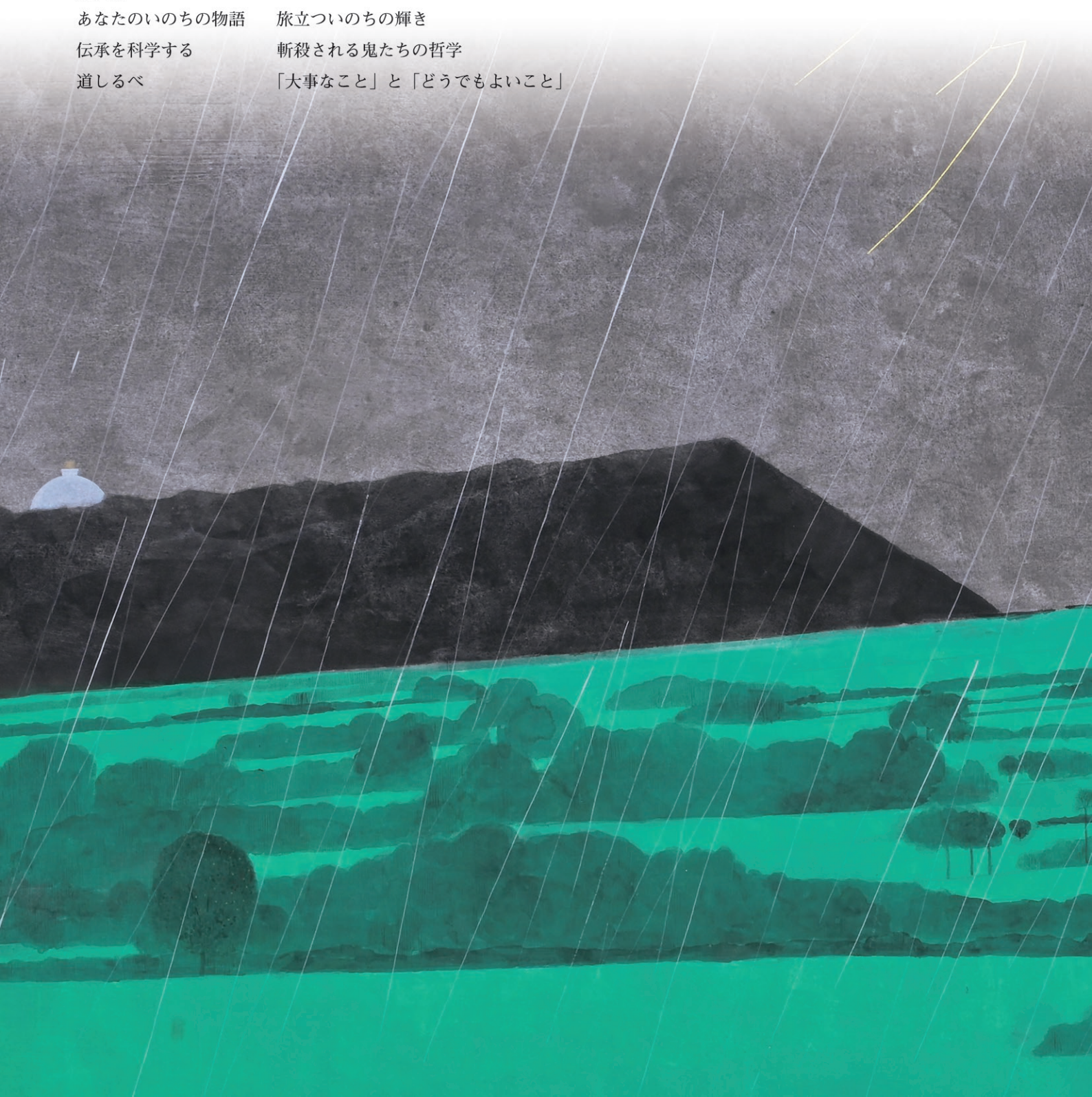
年間特集 「おそれ」

第四回・根源的な「怖れ」について 来住 英俊

連載

あなたのいのちの物語 旅立ついのちの輝き
伝承を科学する 斬殺される鬼たちの哲学
道しるべ 「大事なこと」と「どうでもよいこと」

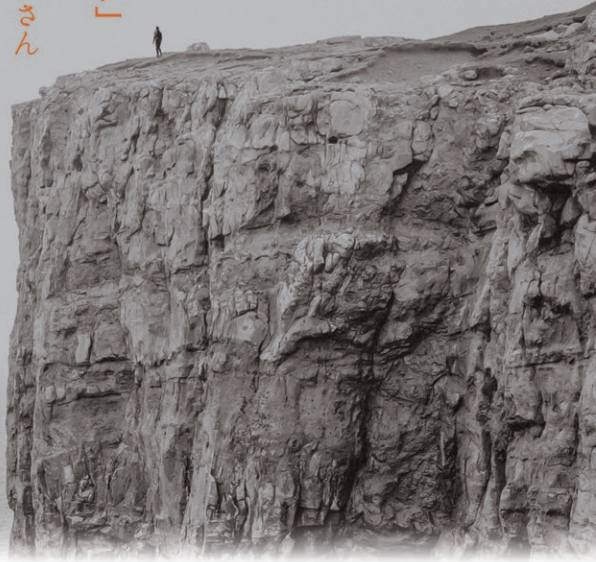
2020 秋季号



年間特集 「おそれ」

第四回 来住 英俊さん

根源的な「怖れ」について



生活に浸透している感情

「怖」と「恐」の字義にはつきりとした違いはないと思うが、私には「恐れ」は具体的な対象のあるもの、「怖れ」は対象が漠然としていて生活全体に浸透している感情という語感がある。そのように使い分けていくことにする。

私は子どものころから、ずっと「怖れ」を感じながら生きてきた。どんよりと暗いばかりの人生を生き

勢や富をさかんにほめていると、独裁者は自分の席の頭上を指さした。そこに重くて鋭い剣が細い糸に結ばれて天井から釣り下げられていた。栄華の極みにある王も、怖れに日々さらされながら生きていくのだという話である。私にはとても実感のある物語である。

もちろん、具体的な対象のある恐れがある。子どもの頃であれば、期末試験の成績が悪くて、親の失望や怒りで夏休みが暗い日々になりそうだという恐れ。社会人になってからは、仕事の成果が上がらなくて、上司や同僚かの評価が暴落しそうだという恐れ。しかし、このような具体的な恐れにはそれなりに対処してきた。恐れていたことが現実になった時も何とか切り抜けて、今までのところ破滅も転落もしていない。ただ、いつも、「きつと次がまた来る」「次はやられてしまう」という不安がある。アニメ「新世紀エヴァンゲリオン」では、「使徒」と呼ばれる怪物が次々に形を変えて地球を攻撃して

くる。ストーリーの難解なこのアニメが社会現象になるほどの評判を得たのは、言葉にして論じることが難しい「怖れ」を形象化したからではないかと思う。

避けがたい「怖れ」

この生活感情を主題化したのは、古代ギリシアの悲劇作品である。英雄的な主人公たちは精力的に行動しつつも、漠然とした破滅の予感にかさかされている。キリスト教の伝統は怖れの感情を必ずしも重視してこなかったが、旧約聖書のヨブ記にいくらかうかがえる。模範的な生き方をしてきた主人公が突然、悲惨のどん底に突き落とされる物語で、そこから神の正義を問おうとした文書とされている。しかし、ヨブの嘆きの中にはこういう述懐がある。「恐れていたことが起こった。危惧していたことが襲いかかった」(3章25節)。ヨブは実は順風満帆であった日々も、「このままですむはずはない」「いつかきつと何かが起こる」とい

てきたというわけではない。大物や

人気者であったことはないが、人はいくらか認められたことはあるし、楽しいと思った日々も多い。しかし、

私の人生の基調をなす通奏低音は、やはり「怖れ」であったと思う。つまり、自分が対処できないような出来事がいつか起こって、自分を押し

つぶしにかかるのではないか。そういう不安が去ることがない。古代ギリシアに「ダモクレスの剣」という

話がある。ダモクレスという人がシラクサの僭主ディオニシオスの権

栄華の極みにある王も、

怖れに日々さらされながら生きている。

う怖れの中できっと生きてきたことがわかる。

怖れを正面から取り上げたのは、近代になってからの実存主義的な思想家である。エルネスト・ベッカーの「死の拒絶」(The Denial of Death)という本があるが、必ずしも「死」の恐怖を論じていない。むしろ人生に避けたい「怖れ」について詳しく論じている。この現実世界は、自分の対処能力を越えている。今はなんとかこなっているようでも、

現実世界は、

自分の対処能力を超えている。

世界がその牙をむいたとき、その暴力は圧倒的 (overwhelming) であり、その前で自分はまったく無力 (helpless) だという感覚である。

私の知人たちは、私がそういう怖れに日々さらされて暮らしていると、は思っていないだろう。むしろ、自信ありげで、時には攻撃的に振舞う

人物と思っているかもしれない。しかし、その知人たちも、心の底を叩けば、抜きがたい怖れの声が聞こえてくるのではあるまいか。

現代における宗教の道

私は、人間は誰でもこのような怖れをいくらかは持って生きているものだと思う。怖れを正面から見据えて、あえて主題化して生きていくのか、それとも、あまり意識しないようにして何とかやり過ごして生きていくのか。これは選択の問題である。実際、根源的な怖れをあまり意識しないようにする手段はいろいろある。パスカルが「気晴らし」と呼んだものである。地面から時に醜い頭を出す恐れに足首をつかまれそうになりながらも、何とか逃げ切れる人と思う人のほうが多いだろう。しかし、本当に逃げ切れたのか？

根源的な怖れを正面から見据える生き方を自覚的に選びとるのが、現代における宗教の道である。キリ

スト教は「罪」という主題を重視してきたが、現代日本ではまず、「怖れ」を問題にすべきだと思っている。生きることに伴う避けることのできない現実から目をそらさず、正面から見据えることは解放の第一歩である。実存主義はそれを強調することが多い。しかし、「俺は見据えるぞ」と勇ましいポーズをとるだけで、人間は本当のところ助かるものではない。宗教の道はやはり、超越的な存在との親密な関わりの中で怖れがしだいに克服されていき、その過程を、むしろ生きることの充実に変えていくことだろう。

来住 英俊 (きし・ひでとし)

1951年生まれ。灘高校、東京大学法学部を経て、1975年、日立製作所に就職。イタリアに旅行したことをきっかけに、1981年に洗礼を受けた。その後上智大学神学部で神学を学び、1989年、司祭に叙階される。「祈りの学校」主宰。主な著書に「目からウロコ」シリーズ(女子パウロ会)、『気合いの入ったキリスト教入門』(全3巻、ドン・ボスコ社)、『ふしぎなキリスト教』と対話する(2013年、春秋社)、『禅と福音』(共著、2016年、春秋社)、『キリスト教は役に立つか』など。



Your Spiritual Stories
あなたの物語
いのちの物語

12話目

「旅立ついのちの輝き」
アストリッド・リンドグレン
『赤い目のドラゴン』

リンドグレン（一九〇七～二〇〇二）は『長くつ下のピッピ』などで知られるスウェーデンの児童文学作家だ。晩年に創作されたこの短い物語は楽しい絵本として楽しまれている。訳文もやわらかで、子どもが読んで喜ぶ様子が目に浮かぶような作品だ。イロン・ヴィークランドの絵も美しい。

ぶたをかつている家族の話だが親は出てこない。五、六歳の女の子と弟の絵がかわいい。四月の朝、大きな母さんぶたが一〇匹の子ぶたを産んだ。ところが、そこに一匹、まっかな目をした緑色のドラゴンの赤ちゃんもいたのだ。なぜ、ドラゴンが来たのか、女の子も母さんぶたも分からない。母ぶたはだんだん慣れてきたが、ドラゴンが鋭い歯でかみついてしまうので、おっぱいをあげなくなってしまった。

そこで、女の子と弟が毎日、ドラゴンにえさをあげるようになって。雨の日も風の日もふたりは豚小屋に通い、えさだけでなく、ドラゴンが好きそうなものをもつていつてあげた。ドラゴンはぶたと違ってえさをほしがったりしない。けれども食べ終わったときには、しつぽを右左にふって、満足そうに音を立てる。もし、子ぶたたちがドラゴン用のえさをとろうとしたら、とてもおこつてかみつく。「ほんとうに気のつよい、小さなドラゴンでした」。

あるとき、ドラゴンは母さんぶたのえさの桶におっこちてしまう。でも、そこで泳ぎだしたドラゴンは「おちついて、じしんまんまんでした。およぐことができるのが、ほんとうにうれしそうでした」。弟が棒でつりあげて出してやると、「こえをあげすにわらい。いつもの赤い目で、わたしたちを見つめていました」。

そんなドラゴンだが、きげんの悪くなることもあった。何日も小屋の隅でふてくされ、しおれていたりする。女の子と弟は腹を立てて、もうえさをあげないぞと意地悪をい

う。「するとどうでしょう。小さなドラゴンは、たちまち、なきはじめました。きれいなみだが、かれの目からあふれるのを見て、わたしたちは、とてもかわいそうになりました」。でも、こちらがなだめるとすなおにしつぽを振って喜んだ。

物語の最後は別れの場面だ。一月二日、夕焼けの美しい日、ふたりは母さんぶたや子ぶたたちとドラゴンを遊びに連れ出した。ところが、ドラゴンは女の子の前にやってきて、頬に鼻先をこすりつける。目は涙でいっぱいだった。そして、まっ

かな夕日に向けて飛び去っていく。飛べるなんて知らなかった。はるかかなたからドラゴンの歌声が聞こえてくる。美しい幸せそうな声だった。その晩、女の子はふとんをすっぽりかぶり、ドラゴンのことを考えて泣いた。

親しい人やペットとの死別を思い起こす人もいるだろう。旅発つ他者を送る。深く涙に暮れるが、生き物が宿していた愛と希望に慰められてもいる。実際の人間はもつと傷んだり荒れたり悲しみに埋没して暮らしている。しかし、真つ赤な夕日といういのちの輝きを見る目がないわけでもない。そんな心のなかの赤い目のドラゴンが蘇る物語だ。

島園進（しまどのすすむ）

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授。著書に、『神聖天皇のゆくえ』（2019年5月）『明治大帝の誕生——帝都の国家神道化』（2019年5月、春秋社）、『ともに悲嘆を生きる』（2019年4月、朝日新聞出版）、『いのちを つくって』もいいですか』（2016年、NHK出版）、『宗教を物語でほどこく』（2016年、NHK出版）がある。



伝承を科学する

科学する

斬殺される鬼たちの哲学

能楽には、主役として「鬼」が登場し、退治される作品がいくつもある。有名な作品に〈紅葉狩〉〈大江山〉〈安達原〉がある。

〈紅葉狩〉では、戸隠山で酒宴を催している女性らが、通りがかった武者らを歓待、誘惑し、飲酒の禁戒を破らせる。女性はのちに鬼に変貌する。眠りから目を覚ました武者は、容赦なく鬼に斬り付けて退治する。

〈安達原〉では、心優しいひとりの姥が、道に迷った山伏に宿を貸して歓待し、糸練りの作業を見せつつ、輪廻の苦しみ、老いの心情を吐露する。だが、寝屋を覗かれてしまった後、鬼に変貌し、怒りの形相を見せ、山伏らを責める。山伏らは、祈禱によって鬼の威力を奪い去る。

〈大江山〉は、訪ねてきた山伏らに一夜の宿を提供し、酒をすすめるような人懐っこい酒呑童子を、主役にする劇である。酒呑童子は、山伏らにすっかり心を開き、自らが比叡山の先住民であり、仏教者に山全体を奪われ、放浪を余儀なくされて

いるという、辛い境遇を物語る。その物語を親身になって聞いていた山伏は、じつは刺客だった。無防備にも、鬼の本性をみせてしまった酒呑童子は、寝込みを襲われて斬殺される。

いずれの能の舞台においても、クライマックスは、鬼の面をつけて赤く長い髪を振り乱した主役（シテ）が、男たち（ワキ）に斬り殺され、祈り殺される場面である。幕切れはじつにあっけない。その分、たんなるハッピーエンドではない、深い何かを見る者に残す。



〈紅葉狩〉（シテ：浦田保親）(C)Yasuchika Urata

武者が鬼に変貌した女性を切り伏せる場面。

殺される鬼の側にも、言い分がある。〈安達原〉の鬼は、登場してくるとまず山伏らに対して、約束を破って寝屋を覗いたことへの恨みを述べる。〈大江山〉の鬼は、暗殺者へと豹変した山伏らを前に「鬼神に横道なきものを」と言い、山伏らの裏切りをなじる。〈紅葉狩〉の鬼は無言だが、武者に対して飲酒戒を含む仏教哲理をリアルに示したという自負を抱いているはずだ。

「鬼」はその語源が「隠」であり、「姿が見えないもの」である（『広辞苑』）。人々は「鬼」に強い恐怖を抱き、排除を期待する。見えないからこそ、なのであろう。その理屈は、今年のコロナ禍によって、われわれにも強く実感できる。

しかし、鬼の言うことにも一理ある。自らの生活もある。見えないところでも人を助け、陰徳も重ねている。そういった鬼たちが、容赦なく斬殺される場面を見ると、殺す側の武者や山伏も、まさに鬼であるとしか言いようがない。

最近の若者らが、「鬼かわいい」などという使い方をするように、「鬼」という言葉は、「過剰な大きさ」を含蓄する言葉でもある。そのような過剰さをもった「鬼」同士が対面するとき、その関係の行きつく先は、あつという間に「殺す—殺される」という、非対称的な関係でしかないのか。もしそうなら、それは世の中をどう導くことになるのか。斬殺される鬼たちの哲学を知りたい。

藤田隆則（ふじた・たかのり）

1961年山口県生まれ。大阪大学卒業。博士（文学）。京都大学助手、大阪国際大学助教授、ミシガン大学招聘教授をへて、現在、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター教授。専攻は、民族音楽学。主な研究対象は、日本の能・声明などの中世芸能および音曲。著書に『能の多人数合唱』『能の地拍子研究文献目録』『日本の伝統音楽を伝える価値—教育現場と日本音楽』『能のノリと地拍子—リズムの民族音楽学』など。現在は、日本の伝統音楽を次世代に伝えていくための応用的研究に従事。

「大事なこと」と

「ふいでもよいこと」

親鸞聖人は『教行証文類』（「教行信証」）の最後に『弁正論』という書物を長引されている。この書は唐代に道教徒が王朝を巻き込んだの仏教弾圧があった。その非を糾すために法琳（五七二〜六四〇）が著した書である。彼は儒教、道教に通じた僧であったが、王朝を誹謗したとして流罪となり、書物は没収された。

唐王朝は出自を李氏と称していた。道教の祖とされる老子も李氏という。唐朝は出自を崇めるため老子と同族であるとされた。王朝の神聖性を示そうとしたものであろう。それを悪用したのだ。

当時、道教が仏教を貶める根拠に「老子胡化思想」があった。老子は超常的な長寿を保ち、老年は西域を経てインドに至ったという。そこで人びとに「浮屠教」（仏教）という、劣った教えを伝えたとする。それが中国に伝わったから、道教と仏教はよく似ていると主張している。道教こそが仏教の本源である。謂わば「本家争い」である。

そこで両者の母の出自、生まれ方、生没年を論じて優劣を競っている。

中でも面白いのは「左右」に対する感覚である。中国は「左」を嫌う。そこで釈尊は右脇より生まれ、老子は左腋を開いて生まれたと対論している。「左遷」「左衽」（左前）と同様である。どうでもよいと思う。でも大事な。

教えの内容では仏教は出世間を肝要とする。対して道教は中国では忠孝を是とするという。すれば出家を勧める仏教は不忠・不孝の極みであり、国家の安寧を脅かす反国家的宗教であると主張する。これは宗教の世俗における有用性を論ずるもので、世俗自体を相対化させる宗教本来の視点を欠いている。

聖人が『弁正論』をどう受けとめたか、その理解はむずかしい。ただ、何故、長々と引用されたのだろうか。どうでもよいことと思われるのだが。

思うに、ここに聖人当時の宗教状況が投影されていたのではないだろうか。「大事なこと」が「どうでもよいこと」で、「どうでもよいこと」が「大事」とされる。痛烈な現実批判ではなからうか。

編集後記

新型コロナウイルス感染症の拡大状況は予断を許さない。ニュースでは連日、各都市の新規陽性者数が報道され、インターネットにはさまざまな情報が氾濫している。それぞれが情報を取捨選択し、それぞれの「正しさ」を見つければいい。しかし「正しさ」は時に凶器となりうる。私たちはそれぞれをニュースで、あるいは身近なところで、目撃しているはずだ。

目に見えない破局への怖れの中で求められているのは、つねにそこから出てそこへ帰っていきけるような、明確な判断基準なのではないだろうか。何があっても決してゆるがせにできない「大事なこと」、それを教えてきたのが宗教だったはずなのだが……。

いまの状況下で宗教に要請されていることがあるとすれば、「大事なこと」を見据えて、怖れを人生の充実に転じていけるような道を、怖れを超えていく道を示すことである気がしてならない。

（釈眞眞）

表紙の絵

雨の恵み雨の恐れ

今年コロナ、大雨の前線停滞で人が犠牲になっている。インドでは乾季から雨季に入ると急に、干乾びた大地が緑の大地へと変わる。雨季の終わりの九月には大雨が降り、田畑や人家が浸水して湖のようになり、山壁が滝となる。日本も熱帯化してきている。我が家のパイヤもバナナもインド菩提樹も元気に育っているが、自然災害は防ぎようがない。

畠中光享（はたなか こうきょう）

日本画家／インド美術研究家
／真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
タウンページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/>（詳細地図有り）
〒543-0062 大阪市天王寺区達阪2丁目1-12
（四天王寺西門交差点 西へ30m）

天岸淨圓（あまぎし じょうえん）

1949年（昭和24年）生まれ。本願寺派布教使。
行信教校講師、大阪教区東住吉組西光寺住職。